

私学の魂

大妻中野中学校・高等学校

子どもたちが生きる未来の変化を見据え 「伝統と進化」の両輪を大切にしながら、 常に改革を重ねて前進を続ける 希望のSGHアソシエイト女子進学校!

私立の中高一貫校が大きく“進化”し、“発展”するときには、その学校全体に、何か不思議な活気が満ちていて、取材時にもそれを肌で感じられることがあります。在校生の表情にも、共通した“明るさ”が見られるものです。「学校に通うのが楽しい!」と感じ、生きいきと通学する生徒が増えるほど、学内はさらに活力を増してくるように思います。そんなふうに生徒が、「学校が大好き!」、「授業を受けるのが楽しい!」と思えるようになるには、やはり「授業改革」が必要になりますし、生徒自身が「学ぶことが楽しい!」と思える、新たな学びのスタイルの工夫が必要です。

そのための改革を、すでに7～8年に渡って進めてきたのが大妻中野中学・高等学校。その改革のリーダーシップをとってきたのが、2013年に校長に着任した宮澤雅子先生です。今回は、大妻中野中学・高等学校ですでに30年以上にわたって教鞭をとり、同校の教育現場から初めて校長に選任されたという宮澤先生にお話を伺い、同校の改革の経緯と、今後の抱負を語っていただきました。



校長 宮澤 雅子先生

DATA

1

大妻中野中学校・高等学校

沿革と最近の改革

- 2013 (平成 25) 年 最新 ICT 環境を整えた新校舎完成。
- 2015 (平成 27) 年 SGH (スーパーグローバルハイスクール) アソシエイト校指定を受ける。
- 2015 (平成 27) 年 ICT 環境での授業実践開始。
- 2016 (平成 28) 年 生徒は一人一台タブレット所有。
- 2016 (平成 28) 年 「グローバルリーダーズコース」新設。「グローバル入試 (英・国・算)」新設
- 2017 (平成 29) 年 「新思考力入試」新設。「グローバル入試」1回→2回に増設。
- 2018 (平成 30) 年 コアコースを廃止。「新思考力入試」を2月1日へ移行。

校 長 宮澤 雅子

所在地 〒 164-0002 東京都中野区上高田 2-3-7
TEL : 03-3389-7211 (代)
<http://www.otsumanakano.ac.jp/>

交 通 JR 中央線・東京メトロ東西線「中野駅」から徒歩 10～15 分。西武新宿線「新井薬師駅」から徒歩 10 分。
JR「中野駅」ほかからバスの便あり。

5年続きで改革を進めてきた 大妻中野がさらに進化 新コース制に変更し、算数入試を導入！

2013年の新校舎の完成を節目に、大妻中野中学校・高等学校は、たゆまぬ改革を続け、「進化する女子校」として、急速に変化・発展し続けてきました。その一連の学校改革・入試改革のリーダーシップをとってきたのが、校長の宮澤雅子先生です。まず今春2017年入試の結果を伺いました。

「今年は全部で11回の入試を行い、234名が入学予定です。6クラスちょうどの、いちばんいい形になりました。初めてシンガポールで帰国生入試を行いました。サウジアラビアなどから飛行機で受験しに来てくれるケースもあって、15名が受験してくれました。初年度にしては多くの方に受験してもらえました」と宮澤先生。

同校が力を入れてきた帰国生入試については、今年も5月27日（土）に、シンガポールで説明会を行う予定だそうです。また来春2018年の入試も大きく変わるといいます。

「細部はまだ変わるかもしれませんが、現段階でほぼ決定です。まず、新しいところでは、2月3日の午後の「算数入試」の新設です。先に導入した『英語入試』、『新思考力入試』に続いて、未来に必要とされる学力を求める新しい入試を実施します」と宮澤先生。

「それと『新思考力』を今年の2月4日から来年は2月1日に移行します。今年初めて2月4日に実施した『新思考力入試』には141名の受験生が出願してくれました。24名合格者を発表して、15名が入学してくれましたので、成功だったと思います。ですので、そのまま4日で行うという考えもあったのですが、我々



海外帰国生を積極的に受け入れ、多様性を持つ教育環境（ダイバーシティ）を作ろうとする大妻中野では、留学生とも交流できる。

のカリキュラムポリシー、アドミッションポリシーを強く伝えたいという意味で1日入試にしました」

もうひとつ、最も大きな改革といえるのが、これまでの「コアコース」を廃止し、「アドバンストコース」と「グローバルリーダーズコース（GLC）」の2コース制にするということです。

「ですので来年の募集は、『アドバンストコース』5クラス、『グローバルリーダーズコース』1クラスという形になります。2020年以降の大学入試の変化や、新しい『学習指導要領』の導入に備え、より柔軟なカリキュラム対応が可能なコース設定にしました。これまでの『アドバンストコース』での手応えと、入学者のレベルアップにも応じて、すべてのクラスで、より高いレベルの教育を行うようにしたいと考えたのが導入の理由です」と宮澤先生は、今回の新コース制移行の背景を教えてくださいました。

一連の改革にともない導入されてきた 英語入試、新思考力入試に続く 「STEM教育」のための算数入試

来春2018年入試では、2月1日に「アドバンスト入試」と「新思考力入試」の両方が行われる形になります。「どちらも、できれば第一志望の受験生に受けに来てほしいですね」（入試広報部顧問の中川徹夫先生）ということです。

それにしても、ここまで毎年連続して入試の改革に踏み切る学校も珍しいといえるでしょう。

「これまでの本校の流れとしては、まずICT環境を整えた新校舎を完成させ、次にはSGHに立候補しました。それからタブレットと電子黒板を使って双方向の授業を導入し、さらに『英語入試（グローバル入試）』、『新思考力入試』を加えてきました。次々に改革を進めてきましたので、本校の教員も『今度は何があるの?』という感じだったと思います」と宮澤先生。学内では自ら「改革の手をゆるめるつもりはない」と宣言して、同校の教員をリードしてきたと聞きます。

「続いて来年からの『算数入試』導入の理由は、これまでに導入した『英語入試』、『新思考力入試』に続いて、次は『STEM（Science, Technology, Engineering and Mathematics）教育』という、将来のハイテクノロジー社会に対応できる学力を育て、未来の社会に必要とされる存在になる教育を行うためです。

具体的にはプログラミングを学ぶことによって、論理的構成力や問題解決能力、継続力、創意工夫の力などを育て、それを通して身につけた力で、将来の働き方や、社会のなかで自分を生かせる存在になるための

『算数入試』と考えました。算数だけにしたのは、他教科との総合点だとバランスも求められてしまいます。この入試ではむしろ、算数が本当に好きな子に入ってほしいと考えました」と教頭の諸橋隆男先生。

「本校にはプログラミングの授業を担当できるとも優秀な教員がいますので、週に1回プログラミング講座を設けて、この『算数入試』での入学者と、そのほかの希望者に向けて、この講座を実施していく予定です。プログラミングはいま注目されつつありますが、専門で教えられる教員がいないと授業では導入できません。本校ですでにICT環境が整えられていたことも導入に際しての利点でした。それと、最近の入学者の算数の力が上がってきたこともあります」と宮澤先生は言います。

宮澤先生が校長に着任してから、大妻中野ではまさに矢継ぎ早に改革を進めてきましたが、その一連の改革はすべて有機的につながっています。

「新しいことを取り入れるのは本当は大変なことです。やはり『改革は進歩』という考え方でいます。教員が新しいことを勉強するので、学校の教育力にプラスになります」という宮澤先生は、教師陣にとっての難しさや大変さも承知のうえで、あえてその道を選択しました。

「新しいことをしていくためには、やはり教員にパワーと勉強する意思がないとできません。でもその分、自分たちの学校力を高める力になっていくので、良いと思ったことは実現していくことが大事だと考えます。

また、それが良いことであれば、やりたいと思ったらすぐ実行しないとチャンスを逃してしまいます。学校というのは1年ごとのサイクルですので、1度その機会を逃してしまうと1年先になってしまいます。」と宮澤先生は不退転の決意を話してくれました。

「もうこれ以上は改革することがないね、という時が



SGH アンシエイト校としての活動と授業を通して、生徒が自らの英語力に自信を高めているという。

来ることを願っています。ただ、気をつけているのは、外見だけ新しいことをやっているような形にはならないようにしたいということです。『STEM教育』にしても同じです。

本校は常に何かをやりながら次の新たな教育の導入を進めている最中です。やりながらプログラムや手法を開発していく。そうしなければ次に進めていけません。やってみて失敗したり、足りないことや必要なことはすぐ改善していくというスタンスです」と語る宮澤先生の笑顔は、自ら厳しい決断をしながらも、大妻中野の教師陣や生徒への信頼と期待に満ち満ちているように感じられます。

2年間の「SGH」の活動と 生徒一人一台のタブレットの活用で 大きく変わった授業や学内での活動

「アクティブラーニングやタブレットの活用も、本格的に始めたのは去年（2016年）の4月からです。中1から高1まで生徒1人1台タブレットを購入して使っています。その前の2年間は、学校で10数台購入しておいて、あるクラスで導入して試行していました。その様子を見て、これならいけると考え、全体で導入することを決めました。

その一方で、SGH（スーパーグローバルハイスクール）の活動も、この3月でまる2年が過ぎました。まる1年たったタブレット活用と合わせて、これによって学校がすごく変わりました」と諸橋先生。いっそう学内が活気づいてきたといいます。

「こうしてグローバル教育や新たなツールを使っただけの教育を進めてきた一方で、私たちが常に大切にしてきたことは『伝統と進化』です。新しい取り組みだけに力を入れていくわけではなく、これまでの大妻の伝統教育が基本になっています。これは100年たっても200年たっても、人間として人格を育てていく教育の本質は変わらないものだと思うのです。それは絶対に変わらず大切にしていこうと…。

そして、そういう人間教育に加えて、世界の動き、未来への動きを見据えた新しい教育も進化させていく。この両輪のバランスを大事にしていかなないと、見せかけの新しいものだけになってしまいます。やはり人格をつくっていく人間教育が土台にあり、そのうえに新しいものを、未来に必要なもののバランスを取りながら加えていくということです」と語る宮澤先生。

大妻中野の校訓は、よく知られている学祖・大妻コタカ女史による「恥を知れ」ですが、同校の建学の精神としてこれに「学芸を修めて人類のために」という

言葉が加わります。

「また、これまで SGH の活動にあたって掲げてきたのは“多様性”です。その多様性を受け入れ、身に着けさせるために、海外帰国生の受け入れを増やすと同時に、グローバルな力の育成のための海外留学とか、ワークショップや講演をし続けてきたなかで、生徒たちの気持ちが、知らず知らずのうちにそうした方向に向いてきたことは確かです」

ちょうど取材に訪れたこの日、学内での模擬国連の活動が行われていました。こうしたときにも、「生徒は自然にタブレットを持参して取り組んでいます」と宮澤先生はいいます。新しく入学してきた生徒は、こうした学びのスタイルを最初から当たり前のこととして受け止め、すぐに馴染んでいくのでしょうか。

「まだまだ十分とはいえませんが、たとえばこのタブレットの導入も、やるならいっぺんに、と考え、中1に入ってきた学年から順に6年間導入していくのではなく、中1から高1までの学年に同時に導入する形を取りました。

各家庭には高価なタブレットを購入してもらうことになるので、正直なところ心配もありました。しかし実際には、保護者の皆さんに快くご協力いただくことができました」と宮澤先生。どのように多くの保護者の理解を得ていったのでしょうか。

「また一年をかけて、保護者に『本校はSGHの学校で、なぜいま本校にSGHの教育が必要なのか』ということをお伝えしてきました。多くはグローバルな第一線で仕事をしてきた保護者ですので、きちんと説明することでご理解をいただけました。結果的に一人も反対意見はなく、それは必要なことだと受け止めていただけたようです。

すでに授業ではスカイプによるオンライン英会話とか、自宅でのE-ラーニングにも使っていますが、この



授業が楽しくなり、自分の成長を実感しながら楽しく学校に通えるという大妻中野の登校風景。

先まだいろいろなおことが可能だと考えています。たとえば生徒へのアンケートにもこれを使っています。今後は部活動でも生かしていけます。生徒一人ひとりがタブレットを持っていることで、できることが広がっていると考えています」と宮澤先生。

改革は一気に進める！ 生徒と教員への信頼が 宮澤校長の決断を後押し。

「導入したタブレットはWifi型です。2013年の校舎新築のときに、数100台を一度に学内のWifiにつなげても大丈夫のようにインフラを太くしてありました。その環境が整っていたことは大きいですね（中川先生）

「タブレットの活用も、今後の大学入試でも求められる英語の4技能の力を高めるために、オンラインの英会話などは非常に効果的です。さらにこの先、TEAPなどの英語民間検定にも必要でしょうし、大学入試でタブレットやPCを使って入試をする『CBT方式』が導入されたときにも慣れていないといけません、生徒にとっては自信にもなると思います」と諸橋先生。

大妻中野の「やるなら一気に進める」という改革姿勢は、他の教育プログラムにも反映されています。

「たとえばイングリッシュ・キャンプは、中1から高1まで4学年、2泊3日で、それぞれ学年でホテルを借り切って一度に実施します。そのときには、生徒8人に一人のネイティブ講師がつく形で行っています。良いネイティブ講師でないと効果も上がらないですから、そこも慎重に選んで派遣してもらっています。

実際には、2泊3日英語漬けになったからといって、急に英語が身につくわけではありませんが、生徒の動機づけにとっては大きいですよ」と宮澤先生。生徒自身のモチベーションが高まることの効果を感じているといいます。

こうして次々と改革を進める大妻中野中高。ここまで急速に多様な改革を進めたケースは、女子校ではあまり例がありません。

「この数年で団塊の世代と若い世代の教員との世代交代もありましたし、新校舎ができたことも変わる大きなきっかけになったと思います」と宮澤先生。

それにしても、この急速な改革への、大妻中野の先生方の対応力には目を見張られます。

「そうですね。先生方はきっと大変だと思います。さしづめ昨年などはタブレット、E-ラーニング、スカイプの三重苦ですね…（笑）。いっぺんにやるからね、とって、3月は研修ばかりでした。すぐ慣れるから大丈夫よ、といいながらやっていました。最初は電子黒

板の導入時が大変でしたね」と宮澤先生は、導入時の先生方の苦労を振り返ります。

それでも、「改革の手をゆるめるつもりはない」という宮澤先生の校長としてのリーダーシップは、やはり強烈なものだったのではないかと思います。

「むしろ、本校では初めての生え抜きの校長で、自分たちの仲間から校長になっているということが大きかったと思います」と宮澤先生は謙遜しますが、やはりこの決断力、行動力は出色です。

「一方では、これまでの知識注入型も大事です。それにプラスして、これらの新しい学び方を新しい科目の授業として加えていくとすると、それは物理的、時間的に無理ですよ。

いま本校が考えているのは、すべての教科で、そういう学び方をしていくという形です。だからこそ可能だと考えています。もしこれを特別な時間で導入すると、微々たる時間しか確保できないですよ。本校では、数学でも国語でも理科でも、やがては全教科でやっていくという方向です」と宮澤先生は考えます。

同校で一齐に導入したタブレットやICT教育は、その新しい学びを実現し、時間や空間の壁を超えて、個々の生徒のモチベーションを高め、力を伸ばす道具です。それを使いこなすのが生徒本人であり、同校の教師陣であるということでしょう。そして宮澤先生は、そうした教員と生徒の力を信じて、この改革を押し進めているに違いありません。

生徒のモチベーションを高め 自主的に学ぶ姿勢と力を育てる 授業改革に今年から着手！

さらに大妻中野では、学校教育の中心である授業の改革に、この2017年度の新学期から全校で取り組むといひます。

「4月からは、これまでに導入～実践してきたアクティブラーニングにプラスして、全教科で生徒が自ら主体的に学んでいくことができるよう、生徒の『学び方』、『授業への取り組み方』改革と、教員の授業改革に踏み出します。先生がどんなに上手な、すごい授業をしても、一方通行の講義型の授業では、生徒の学力定着度は「5%」程度に過ぎないということが、アメリカで研究されたラーニング・ピラミッドという考え方にも示されていますよね。

また、アクティブラーニングにしても、ある先生はやるけど、ある先生はやらないということになると、生徒が戸惑ってしまいます。だからこそ、全教科で一齐に取り組んでいかないといけないと考えています。



スカイプを使ったオンライン英会話に取り組む在校生の様子。25分間、集中して英語で意思疎通を図る！

すでに私たちは、タブレットや電子黒板などの道具を使っての授業をある程度まで進めてきました。ハードは整ったので、これからはソフトだと考えます。

これまでは、生徒の学力を伸ばそうとすると、授業時間数が足りないとか、講習時間が足りないとか、教員は生徒の面倒を見る、教えるための時間に目が向きがちでした。しかし、「生徒が自ら学ぶ」姿勢を育てることができれば、時間の問題を超えることができると考えます。何より生徒にとって授業が楽しいものになれば、学校が劇的に変わるはずですよ。

生徒にとって、学校に行っている間は、人生の半分以上なんですよ。寝る時間以外は…。その時間が楽しくなかったら、生徒にとっては苦痛ですよ。だからこそ、ここを改革することで、一段と生徒が高みに向かうことができるといひます。この改革はきっと成功すると思ひます」と宮澤先生。

そのために大妻中野では、3月末には全教員の研修を行い、新年度を迎えた4月の初旬には、全学年で「学び方」ワークショップを行う予定だといひます。

「これが生徒の持つ可能性を引き出してあげることになると信じています。生徒は100人いれば、特別の子以外はほとんどが同じ能力を持っているはずですよ。だから誰でも、自主的に学ぶことはできるのですよ」と宮澤先生は、この決断に自信をもっている様子です。

「たとえば、いまのGLC（グローバルリーダーズコース）を作ったときに、新しい授業と学び方を導入したところ、最初、生徒や保護者にも戸惑いがありました。『授業であまり教えてくれない』とか…。ところが、そのGLCの生徒の成績がすごく伸びて、このコースを希望する生徒も増え、さらに人気もあがりました」と教頭の諸橋隆男先生もいひます。

生徒と教員の目を世界に向ける SGH アソシエイトの様々な活動と 大妻中野の文化遺伝子！

大妻中野が SGH アソシエイト校の活動の一環として取り組んでいるオンライン英会話も効果をあげているといいます。

「フィリピンの語学学校との提携によって、週1回授業のなかで、25分のオンライン英会話を実施しています。リアルタイムにマンツーマンで行われる英会話レッスンですので、生徒はかなり緊張を強いられますが、『話す力』、『聴く力』を確実に伸ばすことができます。

生徒の集中力も期待以上で、最初は苦労して顔を真っ赤にしながらも、生徒は一生懸命取り組んでいます。終わった後の高揚感も、モチベーションにプラスになっているのは確かです。

授業のなかで1,200名の生徒全員が一斉に実施している学校は、全国で唯一だそうです。一人ひとりのレベルに合わせてレッスンしてくれるのもいいんですよ」と、手応えを語る宮澤先生。このオンライン英会話の導入にあたって、ご自身で率先して生徒と一緒にこのレッスンを体験したといいます。

このほかにも大妻中野では、2020年の大学入試改革を見据えて、英語4技能の力を確実に身に着けるための授業や、英検・TOEIC、TOEFL ITPの校内での実施、ネイティブ教員によるクリエイティブ・ライティングの実施、外国語発表会などの取り組みを行っています。

「学外のホールで行う外国語発表会では、以前から海外帰国生の発音が良いのは当然ですが、最近では、国内で育ってきた生徒にも、差がわからないぐらい発音が良い子が増えてきて、こうした取り組みの成果だと思っています」と宮澤先生は、生徒一人ひとりの成長に目を細めます。

「また SGH アソシエイト校としては、申請時に承認された教育課題に取り組まないといけません。それが認定にあたっての公約でもありますから…。本校が5年かけて公約したのが、人と人とをつないで共感する力を育て、やがて世界に貢献するという…『世界はワン・コミュニティー』というテーマです」と宮澤先生。

そのために、いま世界で教育課題として国連でも掲げられている「グローバル・イシュー(グローバル・ゴールズ)」にも正面から取り組んでいるといいます。そのひとつが博報堂スタッフによる「イシュー&デザイン」ワークショップで、ソーシャルデザインを考えるプログラムです。

「まずコミュニティーを活性化する具体的スキルをやること自体が、生徒にとってはかなり難しいですね。それを博報堂の方がファシリテートしてくれます。世界的な広告代理店である博報堂が、ソーシャル・デザインに取り組む学校として、高校では全国でただ1校、運よく本校を選んでくれたそうです」と宮澤先生。これは決して幸運だけでなく、宮澤先生をはじめとする大妻中野の先生方の熱意と、生徒さんが生み出す活気と求心力が、そういう外部の協力を引き寄せたことによるものではないかと感じられます。

「ほかにも、東京藝術大学とのアーツ(芸術)交流である「アール・ブリュット(障害を持つ方々によるアートのパラリンピック)」にも取り組んでいます。

本校は全校生徒1,500名のうち600名もの生徒が、合唱、ダンス、吹奏楽、チアリーディング、ポピュラー音楽などのアーツ(文化)活動に部活動を通して取り組んでいます。そういう学校文化があるからこそ、こうしたアーツ交流にも自然に取り組んでいける下地となっています」ということです。

「中野は世界的にも文化の聖地的な街です。だからこそできることがあるんですね(中川先生)

「この先は、『e-Spire』という、AI(人工知能)技術を用いたクリエイティブ・ラーニングの取り組みや、IB(国際バカロレア)プログラムの「TOK(知の理論)」の思考コードに基づいた深い学びをするための放課後補講にも取り組んでいく予定です」という宮澤先生。

こうして、ひとつときも立ち止まることのない改革の連続は、すべて「生徒の未来のため」という宮澤校長と、大妻中野の教師陣の熱意と教育姿勢、そして生徒の意欲と保護者の理解がシナジーとなって、従来の枠にしばられない“新たな女子進学校”を形作っていくのでしょう。そんな大妻中野中学校・高等学校の進化から目が離せなくなっています。



合唱部をはじめ文化部で多くの生徒が活躍する同校の文化遺伝子も生かす取り組みが始まっている。